

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は第19回目を迎えるが、今回は阿部展也(1913-71)である。会期は7月1日(木)から24日(土)まで、日、月、祭は休廊であります。

実は第2回オマージュ瀧口修造展で「妖精の距離」展・詩画集:詩・瀧口修造、版画・阿部芳文(展也)1982年7月を開催しているの、阿部展也展は2度目と言うことになる。しかし17年前の展覧会は瀧口修造に重点が置かれており阿部展也については殆んどふれていない。したがって、今回が初めての阿部展也展ということになります。

展示する作品は25点で、そのうちわけは油彩(含エンコスティック)12点、水彩・ドローイング・デカルコマニー10点、版画3点(但し、12点組の「妖精の距離」は1点とする)である。制作年は戦前は「妖精の距離」1937年のみで、戦後は1948年から70年までの作品である。戦前の作品は、現存のものが極めて少く展示することを断念した。「ハナコ」油彩1949年を関係者のご協力で展示することが出来たのはうれしいことでもあります。

阿部展也の写真については、その評価が高く関係者の間ではつとに知られていることであり、私も強い興味があるので展示に努力したが、当方の準備不足と戦前の作品が極めて少いことが分かり、断念した。カタログ・テキストの大谷省吾「阿部展也(芳文)の戦前の仕事」(4)写真の仕事および参考図版20点をご参照いただければ、戦前の阿部の写真のすがたがみえて参ります。いずれにせよ、阿部の写真は今後紹介すべき課題のひとつであります。

カタログの構成は、展示作品については写真で収録し、テキスト3篇:針生一郎「阿部展也——伶俐な野獣の悲喜劇」、山崎省三「白い影・ローマからの手紙」、大谷省吾「阿部展也(芳文)の戦前の仕事」、年譜・榎尾正次(大谷省吾・追加補充)、文献・大谷省吾、あとかき・佐谷和彦「エネルギーは静謐な光に変貌する」となっている。

針生さんは阿部展也のしごとを見守ってきた美術評論家の立場から、オヤと思われるエピソードを交え、阿部の人間としごとを示しておられる。

山崎さんは当時「芸術新潮」の編集長として、同誌に阿部展也のエッセー「遙かなりイタリアの10年」を1971年1月号から毎号連載されていたが、5月6日の阿部の急逝により5月号で中断したのである。従来からお二人の関係は親密で、山崎あての阿部の手紙には、孤独な阿部の心の内奥がみえてきて私の胸を打つのである。

私もそうであるが若い大谷さんは阿部展也と会って話をしたことがない。しかし、美術館学芸員(東京国立近代美術館)の立場から、当時のフォトタイムス、みずゑ、アトリエ等の文献諸資料を精力的に渉猟し、そのなかから自然と阿部のすがたが浮かび上ってくるテキストを示していただいた。これまで見えていなかったものが見えてきたこのしごとの意味は大きい。

榎尾さんには年譜でご協力いただいた。1981年5月に東京画廊と養清堂画廊共催で「阿部展也展」を開催した時のカタログに掲載された榎尾正次編集の年譜をベースに、大谷さんに若干補足していただき今回の年譜となった。榎尾さんは和紙を使う造型作家として名を知られているが、阿部展也に傾倒し、阿部の死後5年後の1976年にいち早く自ら『阿部展也の歩み』を出版しておられる。この文章を改めて読み、大変参考になったことを記して置きたい。

以上、それぞれの立場から書かれたテキストをお読みいただくと阿部展也のすがたがみえてくると思う。四人の方々に深謝申し上げます。

ただ私は私なりに若干のコメントをつけ加えたいと思う。

「妖精の距離」が刊行された1937年前後は遠くの方からヒタヒタと戦争の足音が聞えてくる時代であるが、瀧口にとっても阿部にとっても戦前ではもっとも充実した時代であったと思われる。2人の活潑な行動からそのことがうかがえる。この時期の「写真」に対する取り組み方は2人とも熱心で、今日の写真美術の隆盛を予見するような先駆的なしごとと言えよう。

「飢餓」シリーズ・1949-52年のしごとは比島の戦争末期、死屍累累の情景を見た阿部の思いをダイレクトに、強調して描かれた作品で直視しがたい絵である。面白いのは同時期に代表作「タロウ」、「ハナコ」(ともに1949年)を画き、さらに抜群の描写力で「榎本和子像」、「福島秀子像」を描いていることである。阿部は「リアリズムの絵もやれば、アブストラクトの絵もやる。私は意識的に2刀流である」と記しているが、同時にこれだけ多面的に、多層的に表現ができた阿部の力量とエネルギーには正直なところ驚かざるを得ないのである。

瀧口修造企画のタケミヤ画廊展は1951年6月に始まり、57年2月まで、6年8ヶ月の歳月で201回の展覧会が開催され、多くの現代美術の作家が巣立って行った。その第一回展が阿部展也である。瀧口はこのシリーズ展発足に当り阿部の協力を得たのではないかと推察する。阿部教室で学んだ榎本和子、福島秀子、宮脇愛子等の女流作家は2~3回、このシリーズ展に登場している。

1962年、阿部は日本を脱出し単身ローマに移住する。急逝する'71年までローマを本拠にしてヨーロッパでしごとをする。そのイタリアで、フォンタナ、マンゾーニ等秀れた画家との交流がある。この年のすこし前から、エンコスティックの材料を作らうようになる。エンコスティックを使用する原因は何かという質問に対する答えは山崎省三のテキストに記されている。東欧の古代文化遺跡の石の壁から触発され、イタリアでエンコスティックを使用して画き出したものである。私はこの重い、それこ

そ石壁のようなモノクロームの作品は好きである。私の心に響くのである。

阿部は常に動いていた。住居の移動も海外の長期滞在旅行も多い。このエネルギーギッシュな行動力は阿部の特質である。特に古代の歴史的文化的文化遺跡に興味を示している。しかも場所が特定されている。すなわちアジアでは中国東北、蒙古、フィリピン、インド、そしてアジアとヨーロッパの接点である東欧：ユーゴスラビア、ブルガリア、ハンガリー、チェコスロバキア、トルコである。ここに阿部のしごとの源泉があるように私は思う。また阿部の写真が見事なのは、これら文化遺跡の理解と愛情が彼の根底にあるからである。単なる記録資料的な写真ではない。

この行動的な阿部の生活にも、時としてポツカリと静寂の時が訪れる。存在の根元を問う間に答える阿部のモノログ、心のメッセージが聞えてくる。山崎省三のテキストのなかの阿部の手紙にはその断片が示されている。阿部の全体像がみえてくるのだ。

エンコスティックの作品の後にアクリルの作品が67年から阿部の最後まで続く。円、楕円、四角形、ゆらぎのストライプ、文字、サイン等の単純なかたちと限られた明るい色彩がアクリルで画かれている。喧騒さは微塵もない。エネルギーに満ちた行動家阿部展也が最後に到達した透明な明るさである。阿部のエネルギーは静謐な明るい色面のなかへ吸収され光かがやいている。私は晩年の阿部のしごとに共感する。

今回の展覧会では多くの方に会い協力を得たが、なかでも子息の芳守さんの印象がもっとも強かった。昨年やしごとの関係で、荒木経惟(写真家)、秋山仁(数学者)という大変ユニークな人物とお会いすることが出来て楽しかったが、この芳守さんには驚いた。

彼は第一にボクサーであった。アマチュアのボクシングの大会で優勝した経験がある。第二にアメリカン・グレート・レース(大陸横断レース:ニューヨーク→ロスアンジェルス)で1930年代の自動車を駆り、15日間のロードレースで“NEVER SAY DIE”賞に輝いた経歴をもつ。第三に、北極の頂点に立った実績を持つ冒険家である。どれひとつとっても、私には手も足も出ない世界のことで、ただただ感嘆するのみである。

このような人物は日本の教育で育つわけがないと私は頭からきめていたが、何とわが国の学校で学び高等学校中退だと言う。中退がいかにも芳守さんらしい。となると、ご両親の遺伝子の影響が大きいと断ぜざるを得ないのである。

現在50歳で、先見性のある実業家として活躍中である。御礼を申し上げるとともに今後のご健闘を祈るものであります。

この展覧会開催に当って次に記した方々のご協力をいただき深謝申し上げます。ありがとうございます。

阿部敏子(展也夫人)、榎本和子、杉山和子、大下敦(美術出版社)、今泉雄四郎(東京画廊)、阿部雄治(養清堂画廊)、山本隆志(ヒノギャラリー)の諸氏、

その他、特に名を記さないが多くの方々のご協力を得たことに感謝申し上げます。

最後に、長らく病臥中の瀧口綾子夫人が、令弟の鈴木陽、光子夫妻の看護も空しく、心不全のため、昨年8月15日永眠されました。享年86歳。綾子夫人は戦前、現代美術の画家として活躍され、A・ブルトン、P・エリュアール共著「シュルレアリスム簡易辞典」(1938年刊)には、鈴木綾子「風景」(1935)の作品写真が収録されています。綾子夫人の力量を示すものであります。結婚後は絵画の道を退き、瀧口修造を全面的に支えるしごとを全うされました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

1999年6月1日

佐谷和彦